

最大のパラドックスからの脱却
—視野を広げると何が起きるか—
Otomo Mariko

世紀のパラドックス

核兵器の誕生は、世界にかつて想像したこともないほどのパラドックスをもたらした。一部の国は、それがこの世界で権力を持ち続けるための唯一の道と信じ、核兵器の保有・維持を必要だと考えている。それらの国は、たとえ核兵器がこの世に存在すべきではないことに同意はしていても、他国が核兵器を廃棄するなど信用できず、自国の核兵器を持ち続けることを選択している。他方、核兵器を持っていない国々は、核保有国の「核の傘」に入る必要性を感じている。言い換えれば、攻撃への恐怖が核兵器を保有することに向かわせているが、その行動がさらなる恐怖を引き起こしているのだ。

多くの人々がこのパラドックスを信じている。核兵器のある世界で平和を維持するためには、それ以外に方法がないと考えている。つい最近も、ロシアのプーチン大統領がウクライナとの戦争で核兵器を使用すると脅しており、こうした絶望感も理解できる。彼の発言によって、終末時計は真夜中まで90秒という歴史的な時刻に達した。私もまた、この世界から核兵器はなくならないという事実を受け入れ、このパラドックスを信じていた。私は被爆国で育ち、核兵器がもたらす恐怖を知っていたが、世界の分断はあまりにも深く思えて、核兵器をなくすことは非現実的だと感じていた。しかし、交換留学生としての最近の経験は、私にこの考えを大きく変えさせた。

優劣ではない、ただ違うだけ

交換留学を選んだ当初は、アメリカ文化を肌で感じられるこの機会をととても楽しみにしていた。しかし、派遣先の人口統計を調べたところ、ほぼ全員が白人であることがわかり、人種差別的な扱いを受けるのではないかと心配になった。そして残念なことに、その心配は的中した。

「君が故郷はさぞかし明るいんだろうね。原爆を2発も落としたんだから！」

私はカッと熱くなるような怒りを感じつつも、無理に笑顔を作った。数日後、別の友人が言った、

「でも真面目な話、もし我々が広島と長崎に原爆を落とさなかったら、戦争はもっと長く続いていたかもしれないよ。戦争を終わらせるための最も効率の良い方法だったのだろうね。」

ヒロシマとナガサキを未だに誇らしげに正当化する人が多い国に来たのだから、こういったことは予想しておくべきだったのかもしれない。それでも、私は彼らがあまりにも気軽にヒロシマ・ナガサキの話題を持ち出したことにショックを受けた。これには怒りを覚えたものの、これは文化の違いなのかもしれないと思った。彼らはアメリカの決断が戦争終結に繋がったと学んだが、これは決して歴史的に不正確な

ことではない。原爆投下によって犠牲者の数を減らすことができたというのも、合理的な思考の結果である。しかし、私はヒロシマ・ナガサキが犠牲者の数を減らしたとは考えていない。私とその2人との違いは、この2発の原爆がもたらした壊滅的な影響、つまり失われた命、破壊された街、そして今日まで続く健康被害について、彼らが学んでいなかったことだ。彼らの考えは、彼らが世界をどう捉えているかを反映したものに過ぎない。このことに思い至ったことで、彼らのそばにいることの居心地悪さは少し軽減したが、文化的な視点を変えることなど不可能だと思い、核兵器のない世界については、より無力感を感じるようになった。

しかし、さまざまな多文化体験を通して、人々の考え方をを変えることは難しいかもしれないが、視野を広げることはとても簡単だと気づいた。「優劣ではない、ただ違うだけ」という考え方を持ち続けられればいいのだ。ホストファミリーが教えてくれたこの言葉は、国境を越えた友人たちとの絆を深めるのに役立った。

初めて教会に行ったときにもこれを感じた。私は教会に行ったことがなかったが、ホストファミリーがとても信心深い人たちだったので、毎週日曜日に一緒に教会に行くようになった。私のような無神論者は教会の人たちとうまくやっていけるはずがないと思っていたし、教会の人たちは私が教会の信者でないことを軽蔑するのではないかと密かに思っていた。しかし、驚いたことに、そして嬉しかったことに、教会の人々は私を歓迎し、私が信者でないことを気にしていないようだった。私の存在によって彼らの宗教観が変わったわけではなかったが、宗教に対する視野が広がり、神を信じないという選択をする人もいるということを理解してもらえた。同時に、自分がどう思われるかを気にしていた私自身がいかに近視眼的であったかを思い知らされた。私は長い間をかけて宗教に対する固定概念を作り上げ、宗教を信じている人たちは攻撃的で、異なる信仰を持つ人々に理解がないと思いついでいたのだ。

信教の自由を受け入れることと、大量破壊兵器のない世界を実現することにはずいぶん乖離があるように思えるかもしれないが、原理は同じだ。あらゆる国の人々が視野を広げれば、互いの違いを受け入れ、チームとして働くことができる。そうして初めて、国家間の信頼を築くことができる。

これは長いプロセスとなる。まずは長年の固定概念を打ち破る必要がある。これが私の世代とそれに続く世代に課された仕事である。今日の世界は深く分断されていて、この小さな目標でさえ絶望的に思えるかもしれない。しかし、「優劣ではない、ただ違うだけ」という思考さえあれば、異なる文化的背景を持つ人々が共存し、その上で信頼を築くことができるということを、私自身が証明している。

だから、私たちはパラドックスの中に生きていてのではない。核兵器による恐怖に対する唯一の答えは、さらに多くの核兵器を保有することではなく、世界から核兵器をなくすことなのだ。